

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653284

研究課題名(和文) 東アジア共同体意識を高める教育実践プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文) Study on development of the educational practice program to raise East Asia sense of community

研究代表者

甲斐 雄一郎 (KAI, Yuichiro)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：70169374

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は言語教育、歴史教育、生涯学習の領域において、東アジア共同体意識を高めるための教育実践プログラムの開発に資する知見を獲得することにあった。三年間の調査研究による以下の成果によって、この目的のための足場作りに資することができた。

言語教育領域においてはこれらの国・地域における共通教材としての論語に着目し、台湾、中国の中学生との学習交流を図るための作業を進めた。歴史教育領域では、国境をこえた共通教材に関する研究動向をまとめるとともに、韓国の高校選択科目である「東アジア史」の内容分析を行った。生涯学習領域では中国の社会教育講座における東アジアに関する議論の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to acquire knowledge to contribute to the development of the educational practice program to raise East Asia sense of community in a domain of linguistic education, history education and the life study. By the following result by the research for 3 years, I was able to contribute to the making of scaffold for this purpose.

In the linguistic education domain, I paid my attention to the Analects of Confucius as the common teaching materials in these countries, areas and pushed forward work to plan the learning interchange with Taiwan and Chinese junior high student. In the history education domain, I settled the trend about the common teaching materials beyond the border and analyzed contents of "the East Asia history" which was a Korean high school elective subject. In the life study domain, I clarified one end of the argument about the East Asia in the Chinese social education lecture.

研究分野：教科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：東アジア共同体 東アジア史教材 社会教育 古典教材

1. 研究開始当初の背景

2005年、日中韓3カ国による共通の歴史教科書が刊行された。ここに端的にみられるように、東アジア地域において、認識を異にする当事者同士による討議・実践の試みは、多くの困難を浮き彫りにしながらも、各論レベルで広がりを見せてきた。こうした東アジア共同体意識の形成を射程にした種々の実践を見据えつつ、「近くて遠い」と形容される近隣アジア諸国とのより友好的な相互理解に基づく交流関係を構築する必要が感じられた。

それをわれわれは「東アジア共同体」として措定した。これは東アジア地域における「経済ブロック統合」という文脈で語られる概念であるが、そのような解釈をこえて、さまざまなレベルでの交流を通して、新しい文化を創造するような、地域共同体の概念にまで拡大解釈することも可能である。その一方で、こうした問題意識から国内の国際理解教育の実態に着目するならば、学校教育および生涯学習の領域においては日本文化の固有性を強調する教育プログラム、また外国の文化を紹介するものが主流といえるものであり、日本において真の国際的市民を育成するためには、相互紹介のレベルを超えた実践の必要性があった。

こうした文脈において、教育学研究としては「東アジア共同体」という抽象的な概念を身近なレベルで具体化し、具現化していくための教育実践プログラムを東アジアの国・地域の研究者・教育関係者と協働して開発・実践することが重要であると考えられた。

2. 研究の目的

国家間の様々な利害関係が絡み合い、対立意識へと容易に変容してしまう事態が繰り返されている今日、教育学研究においては、東アジアの国・地域との協働が不可欠なものである。そこで本研究では、日本を中心とする中国、韓国、そして台湾という東アジアの国・地域が協働して、東アジア共同体意識を高めるための教育実践プログラムを開発することを目的とする。

具体的には東アジア地域に内在する多面性と重層性における差異を、当該地域の国家を超えた共有すべき価値として理解しながら、その土台にねざしている共通性(共通価値)を「東アジア共同体」の紐帯として、アイデンティティの根拠に位置づく可能性に示唆が得られるものと考えられる。そこに着目することによって、今日的に現象されている表層的・感情的な対立の構図を超えて、「東アジア共同体」としての共通理解と互恵関係を漸進させる、教育の実践的方法論の確立への寄与を目指す。あわせてそれぞれの問題領域における中国、韓国、台湾、そして日本という多国間比較の視点から共通性や差異性を析出する。

3. 研究の方法

本研究では「言語教育」「歴史教育」「生涯学習」という三つの研究領域を設定した。この三領域は、教育内容に文化的・歴史的視点を柱にしなが、異年齢集団を対象にする教育学の中心領域をカバーしている。これらの領域における調査研究・実践構想を通して「東アジア共同体」像を伝えることができる事柄を教材として具現化するとともに、教育実践プログラムの開発に取り組む。

このうち「言語教育」領域では教材としての論語に着目した。論語は日本の中学校、高等学校の国語科用教材として久しく位置づけられているが、日本にとどまらず、東アジアの多くの国・地域における中等教育のカリキュラムにも位置づけられているはずである。そこで論語はこれらの地域における学習のための共通素材といえることができる。本研究ではこのことに着目し、論語学習の成果としての学習者が書いた随筆の交流の実現を目指した。ここでは学習者の随筆群を教材化しようとしていたのである。

「歴史研究」領域ではまず、日本と韓国・中国の社会科教育において国際理解の視点がどのように導入されているか教科書や実践より明らかにする。1945年以後の日本と韓国・中国の社会科学学習指導要領(教育課程)と各時代において主に用いられていた教科書の叙述を分析対象として、その比較検討作業を行う。次いで東アジアで最も重要な課題となる近代の歴史についての歴史認識を探るための基礎作業を行うこととした。とくに2012年4月より韓国では高校歴史選択科目として『東アジア史』の授業実践が開始されることに着目し、韓国の歴史教育に関する教育課程および教科書の分析を行うことにした。

「生涯学習」領域では国内ととくに中国の公民館および類似施設を対象として、多文化教育をテーマにした講座とその内容を明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

「言語教育」領域では以下の三つの作業を行った。

一つめの作業は中国、韓国、台湾、日本の中学校用国語科教科書に掲載された論語教材とその指導方針の確認である。この作業を通してこれらの国や地域においては論語を教材としていることがあらためて確認された。あわせて教科書に掲載された指示によるならば、学んだ論語の章句を現代に当てはめて理解するように求める方針も、これらの国や地域においては見いだすことができた。ただしかならずしも同じ章句が採録されているわけではないことも明らかになった。

二つ目の作業は国内の中学生による、論語をめぐるエッセー作品の収集および分析である。

作品はA中学校第3学年の協力によって

得た数十編を検討対象とした。

検討の観点は当該学校の中学生が選択した章句、エッセイにまとめる際に利用した方略である。多くの中学生が選択した章句は以下の8編であった。

學而時習之。不亦説乎。(學而)
温故而知新。可以爲師矣。(爲政)
學而不思則罔。思而不學則殆。(爲政)
知之爲知之。不知爲不知。是知也。(爲政)
剛毅木訥。近仁。(子路)
君子和而不同。小人同而不和。(子路)
其恕乎。己所不欲。勿施於人。(衛靈公)
過而不改。是謂過矣。(衛靈公)

これらの読みに基づく自らの考えをエッセイにまとめる際には、表現上の方略として「論説型」と「物語型」を利用していることが明らかになった。本研究ではこれに加えてより上位年齢の学校の生徒作品に見られる「説明型」ともいべき類型を加え、比較検討のための枠組みとすることとした。

三つ目は中国、韓国、台湾の中学校に相当する学年段階の学習者との交流である。このことについてはそれぞれの国・地域の中学校関係者と連絡をとり、こちらの依頼に関する交渉を行うことから始めた。

いずれの国・地域に関係者も本研究の計画について積極的な関心を示したものの、その後の経過が順調に進展したとはいいがたい。その困難さの根拠をはっきりさせたのがこの領域における本研究の一つの成果であるともいえる。それは大きく分けるならば(1)翻訳の困難、(2)教育課程上の異同、(3)学習内容の差異、(4)古典観の差異によるものである。

韓国の場合は選択科目「漢文」に論語が位置づけられているものの、まず「漢文」科を選択科目とする学校それ自体が多くはないことが一つのハードルであった。また「漢文」科を選択した学校であっても、教科書が求めるような内容に踏み込んだ指導まで行っているところは少なく、一般には韓国では用いられていない漢字指導の教材としての扱いであることがわかった。上記でいえば(2)に相当する障壁である。このため韓国の論語学習の実態については本研究では保留とすることとした。

中国の場合は北京師範大学の国際シンポジウムで本研究の計画を説明し、また、関心を示してくれた、さる大学附属中学校に対し、具体的な計画案と生徒作品の中国語訳を送り対応を待っているところである。

上記(1)から(4)の困難を鮮明にしたのが台湾の研究者、また中学校教育関係者とのやりとりであった。(3)にかかわる問題としては、日本の学習指導要領では位置づけられている随筆という表現ジャンルを台湾ではかならずしも学校教育で行ってはならず、こちらの求めに応じるためにはそのための準備に多大な負担がかかることがわかった。また、(4)にかかわる問題としては聖

典に類する論語に関してはそれを受け入れて日常生活での実践こそが求められるのであって、中学生の段階で何らかの主体的な感想までは求められない、という反応が少なからずあった。しかし、そうした問題をふまえてなお、さる大学附属中学校が対応して下さることになっており、6月に参上して完成作品を受け取ることになっている。ここから次の段階への展開が期待されるのである。

「歴史教育」領域では対象とした国・地域における歴史科の教科内容を踏まえて、国境をこえた歴史の教科書における共通教材に関する研究動向をまとめた。とくに韓国においては2009年改訂教育課程においては、それ以前に比べて韓国史の比重が多少下がるとともに、『東アジア史』教科書では中国や日本に関する未来志向の歴史叙述が増えたこと、生徒に考えさせる探求型の問いが教科書に増えたことを特徴として指摘することができた。

「生涯学習」領域では以下の二つの成果をあげることができた。一つは日本はもとより中華人民共和国の研究者とともに、2011年から12にかけての生涯学習の動向をまとめることができたこと、もう一つは実際の社会教育活動について実態調査を行うことができたことである。国内においては多文化教育をテーマにした講座を実践している公民館は在日コリアンや中国帰国者が多く利用していることから川崎市や国立市において広く実施されていることが明らかになった。一方中国においては社会教育講座の実態の解明につとめた。その結果、地域教育施設(社区学校)におけるプログラムを調査した結果、「東アジア」を題材とした講座は少数ではあるものの、自主的に形成されたサロンやそこでの市民の議論を知ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

國分麻里、「国民史」を超える試み - 歴史教科書の開演および共通教材の作成に関する研究動向、筑波教育学研究、査読無、12巻、2014、55-73

上田孝典、中国の生涯学習・この1年 - 2012~2013年、東アジア社会教育研究、査読無、18巻、2013、64-70

上田孝典、小林文人、金侖貞、李正連、内田純一、上野景三、東アジア・生涯学習における自治と共同、査読無、18巻、2013、8-27

平田諭治、嘉納治五郎の留学生教育を再考する - 近代日中関係史のなかの教育・他者・逆説、教育学論集、査読有、9巻、2013、63-97

國分麻里、韓国『東アジア史』における近代史の内容分析 - 日本に関する叙述

を中心に、中等社会科教育学会、査読有、
32巻、2013、125-134
甲斐雄一郎、韓国、台湾、中国から見た
日本の国語教科書、公開講座ブックレ
ット・国語教科書研究の方法、査読無、3
巻、2012、32-34
上田孝典、中国の生涯学習この一年、東
アジア社会教育研究、査読無、17巻、
2012、146-148
甲斐雄一郎、拡張する読書共同体、学校
図書館、査読無、732号、2011、
60-61
小林文人・李正連・上田孝典、東アジア
の社会教育における研究・交流の歩みと
新しい地平をさぐる、東アジア社会教育
研究、査読無、16巻、2011、10
-28
手打明敏、公民館とCLCの相互交流に期
待されること、月刊公民館、査読無、6
53巻、2011、12-15

〔学会発表〕(計5件)

甲斐雄一郎、アジア諸国との連携に基づ
く教育学研究の在り方 - 論語学習の台
湾・日本間研究への試みから、201
4・3・8、第12回筑波大学教育学会、
筑波大学附属中学校
甲斐雄一郎・秋田哲郎、古典理解の枠組
みについて、台湾日本語学会第303例
会、2014・2・15、台湾・台北Y
MCA
國分麻里、日韓歴史共通教材の新たな地
平を目指して、歴史教育研究会主催・日
韓国際シンポジウム、2014・1・1
1、國學院大學
甲斐雄一郎、古典化への参加、中日言語
文化の交流と共有、2012・12・1
6、中華人民共和国・北京師範大学
甲斐雄一郎、近代日本における国語科教
育の課題をめぐって、日本語教育国際研
究大会、2012・8・18、名古屋大
学

〔図書〕(計1件)

三時眞貴子・鈴木理恵・中村勝美・本多
みどり・土井貴子・杉原薫・岩下誠・香
川せつ子・安原義仁・小宮山道夫・山下
達也・平田諭治・石田雅春、教育の歴史・
理念・思想、協同出版、2014年、3
35(219-242)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲斐 雄一郎 (KAI, Yuichiro)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：70169374

(2) 研究分担者

井田 仁康 (IDA, Hi toyasu)

筑波大学・人間系・教授
研究者番号：20203086

上田 孝典 (UEDA, Takanori)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：30453004

長田 友紀 (OSADA, Yuki)
筑波大学・人文社会系・講師
研究者番号：70360956

唐木 清志 (KARAKI, Kiyoshi)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：40273156

國分 麻里 (KOKUBU, Mari)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：10566003

平田 諭治 (HIRATA, Yuji)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：40311807

手打 明敏 (TEUCHI, Akitoshi)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：00137845